

なけなしのかね

奈良工業高等専門学校
現代視覚文化研究会
2018年度 秋会誌



まえがき

みなさんはじめまして。そうでない人もいると思いますが、そんな方々はおひさしぶりです。現代視覚文化研究会、略して「現視研」の会長のあつこどんです。この度は秋会誌「なげなしのかね」を手にとらせていただきありがとうございます。

さて、今回はせっかく多くの人に見ていただいていると思うので、ちよつとだけ現視研の紹介をさせていただきたいと思います。普段はふざけ倒しておりますが、今回はちよつと真面目モードでいきます。

まず、どんな活動をしているかといいますと、普段は体育館の近くにある部室で漫画を読んだり先輩後輩入り混じってボードゲームなどをしたりしています。めちやめちやアットホームな同好会です。もちろん年4回の会誌製作もやつてますよ。夏と冬はホームページで、春と秋はこのように紙の状態で頒布して、部員たちの作品を公開しています。また、春と秋の会誌はホームページでも公開しています。

そしてこの同好会の特徴は……自由度が高いことです。「こんな企画がやつてみたい！」という場合は、やる気と材料さえそろえば、たいていのことはできます。あとオタクな人たちが多いことですね。かく言う私もアニメやら漫画やらゲームやら、色々なものにハマっている人間です。刀とか宝石とか父親の世代からシリーズが続いている、とあるロボツアアニメとか……余談ですが、曲からハマってそのままアニメにもハマる……というパターンが多いですね。

ぶつちやけ色々なものにハマることはいいことだと思っております。だってそれだけ興味の惹かれるものが多いっていうことですから。

個人語りはこの辺にしてそろそろまえがきを終わらせてもらいます。

それでは、楽しんでいってください!! アディオス!!

バナナをトースターで焼きながらこれを書いていた

あつこどん

目次

CONTENTS

Novel

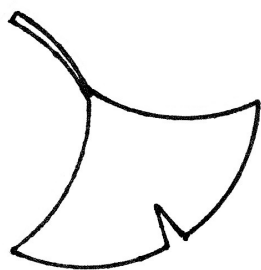
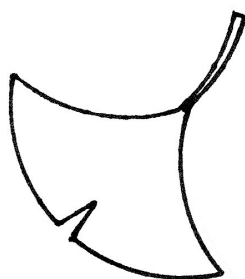
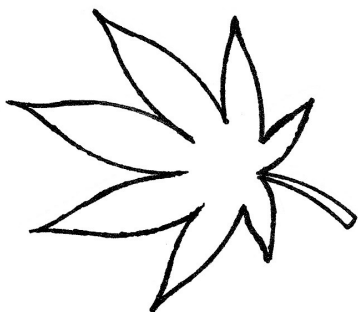
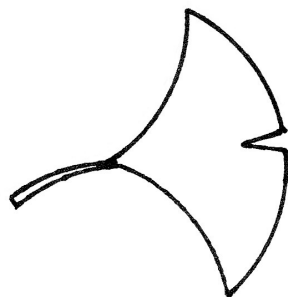
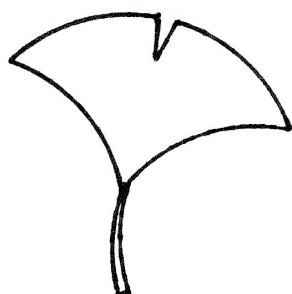
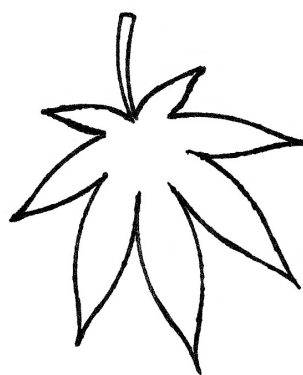
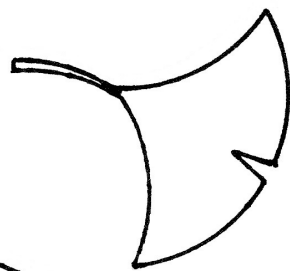
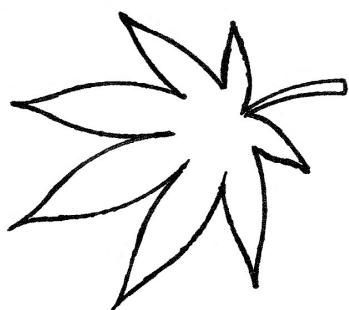
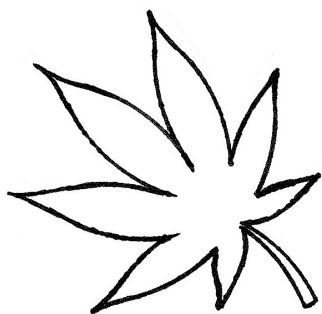
代わりに	— TEXTER	4
夢か現か	— さん	8
天上の愛	— タニイム	10
月夜の嘘	— えのぐふで	12
First contact	— キツタヌ	18
たった一つの願い事	— 若葉	22
遺された者	— 如月 吟	26

Illustration

タニイム	32
あっこだん	34
みの	35

表紙 シルフィイ
扉絵 如月 吟 タニイム

文章作品



如月

代わりに

TEXTER

妹が死んだ。一年前のことだ。

あれは実に不幸な事故だった。

文章にしてみれば、居眠り運転のトラックが人を轢いただけの、ニュースにもならないような些細な出来事。どちらかと言えば、トラックの運転手のブラックな労働環境のほうが問題となった事故だった。

だからこそなのか、俺は妹を助けてやれなかったとか、もつと何かしてあげたかったとかと考えることはなかった。

何も感じなかったわけではない。ただ、大切な家族の一員を失った喪失感や深い悲しみには襲われたが、感じていたのはそんな純粋な感情で、他には何も思わなかった。

そろそろ夏も終わろうかという今日この頃。

俺はまだまだ暑い夕暮れの中、コンビニに向かって歩いていった。

そうか、今日だったか。

自分とは関係のない葬式会場の案内看板を見ながら、ふと思いつく。

涙さえ出ないほどの激しい感情が溢れていたあの頃から、もう一年経った。そう思うと時が経つのも、それによってあの日の記憶が薄れるのも、ずいぶん早く感じる。

あるいは逆だろうか。そんな馬鹿なことを考えつつ、歩く足は止めない。

そんな明日の朝には忘れていそうな回想は、横から飛んできた声に中断を余儀なくされた。

「ちよいと、そこのお嬢さん」

思わずその方向を見る。

誰かの家のガレージの前にごく小さい、前の道路の通行を阻害しないくらいに小さな白いテントが張られていて、その中で男性が手招きしていた。

二十歳である俺と同程度の年齢に見える。黒スーツの頭上にはベースボールキャップが乗っており、そのちぐはぐさに思わず目を合わせてしまう。

「こちらへどうぞ」

椅子のようだが椅子にしては低すぎる台を手で示して、座れと促される。

周囲を見回すが、俺と彼の他には誰もいない。お嬢さんと呼ばれるような女性はいないし、俺自身もお嬢さんと呼ばれるような容姿ではない。

「ああ、あなたですよ。すみません、ここではお嬢さんと呼ぶことに決めているのです」

改めて彼は俺を座るようにすすめる。どうやら人違いではなかったようだ。

この不気味なテントに入つてよいものか少し悩んだが、どうにも悪い人には見えなかったので、話ぐらいいは聞こうと思いつ中に入った。

「おかしかったら笑つてもいいですよ。その通りですからね」

「あなたはそういう人なんですよ。もう気にしませんよ」

そうですか、と小さく返答し、特に表情を変えず応対する男。出そうとしていたらしい茶を断ると、男では早速、と言つて居住まいを正した。

「率直に聞きます。最近、誰か身内がお亡くなりになられましたか？」

流石に連続で身内が亡くなるような不幸の極みではないので、亡くなったのは一年前、妹だけだ。

そのことを伝えると、男は俺の顔に手をかざし、そして「妹さんですか」と確認するように呟いた。

「不幸な事故だったようですね」

そして記憶でも読んだか、俺の思っていた感想をそっくりそのまま口に出す。

超能力じみたパフォーマンスに気味の悪い感じはしたが、最初からそうだったので言葉にはしなかった。

男はしばらく黙っていたが、やがてすつと口を開いた。

「妹さんにもう一度会いたいとは思いませんか？」

コンビニから帰ってきて、ついでに買ったスナック菓子の袋を開ける。

いつもの匂いに少し安心する。

結局あの後、彼の提案は全面的に断った。

話の内容としては最初の「妹ともう一度会いたいか」に尽きたが、あまりにも非現実的なのと、妹に悪いと思っただからそうした。

会えたとしてそれは、妹のふりをした誰かだろう。もし仮に本人に会えたとしても、死後の世界から呼び戻すのがよいことなのか見当がつかない。

つまんだ菓子をいつも以上に強く噛む。こんな非現実なんかで時間を浪費するなら、忘れることにしよう。

今日はただコンビニで買い物をして帰ってきただけだ。

サクサクという軽い音と、外の環境音だけが流れる。

不審者に話しかけられただけなのだが、思いの外心を乱されてし

まった。次からはもう少し落ち着いていられるようにしよう。

無心でスナック菓子を食べ続けた。

少しお腹が膨れてしまったが、外が暗くなっているのに気がつき、夕飯を食べることにした。

冷蔵庫の中を適当にあさる。

ピンポン。

チャイムの音が響く。

もしかしてあの不審者につけられていたのだろうか。一瞬想像するが、出ないわけにはいかない。

覗き窓から外を伺うと、俺はその目を驚愕に見開いた。

妹。妹だ。本物の妹がそこにいる。

偽者じゃない。雰囲気でわかる。

生前よく着ていたお気に入りの服を着ているとか、事故当日と同じ靴を履いているとか、そんなことはどうでもいい。

驚きのあまり声すら出なかった。

生きていたのか？ そんなはずがないのは自分がよく分かっている。自分について考えると、少し冷えた頭に先程の男の顔が浮かんだ。

「断ったつていうのに……！」

困惑の次に感じたのは怒りだった。

まるで目の前で墓を掘り起こされたかのような怒りが湧き上がるのを自覚した。

玄関を開け、妹の腕を掴む。妹が小さく悲鳴を上げるが、それを無視して先程のテントまで走る。

腕の感触で、より妹本人である確信は高まった。ならば、どうやって。

それ以前に、戻せるのか聞かなければならない。

テントは変わらず住宅街のと真ん中、民家の前で佇たまたまんでいた。

薄暗さの中街灯だけで照らされて、怪しさの上に不気味さも感じる。

「おいー」

俺は後ろの妹が怯えるのも構わず、声を荒げてテントに突撃した。中にまだいるとは限らなかつたが、覗き込むと変わらない姿勢で座っていた。

「どうしました？無事に再会できたでしょう」

事もなげに言う男。その表情は相変わらず読めない。

俺は後ろから名前を呼ぶ妹の声に気が付き、振り上げた手を下ろした。

「本物かどうかも分からん」

現実的な論理で一拍おく。まだ冷静ではない。

しかし、冷静になつてもいけない気がした。

なぜ誰かが亡くなると悲しいのか、その理由のうち、大きいのは二度と会えなくなるからだろう。それがもう一度会えるとなればどうなるだろう。

そんなの間違っている。

ただ、間違っていると叫ぶしかできないから、俺は感情のまま主張する。

「元に戻してくれ」

言つてから、一言目と二言目が矛盾していたなと他人事のように思った。

男は顎に手を当て、少し思案している風だつた。

聞こえていないのかと思ひ再度口を開くと、こちらに手のひらを向ける。後ろでゲル状のものが動く音が聞こえた。

振り返つてはならないような予感がしたが、思わず振り返つてしまった。

そこに立っていたのは妹ではなく、知らない男。少年と言つてもいい年齢だろうか。

「安心してください、彼は私の弟です。それに、私の弟が妹さんに

変身していたわけではありませんので」

少年は男に手で招かれると、すたすたと歩いてテントの中に入つていった。

「どうして、すんなり元に戻した」

すぐ帰るつもりだつた。時間はあつたが、この不審者のために用意したわけではない。

でも気になつてしまった。俺はまだ冷静ではない。

男は今度は淀みなく答えた。今までで一番の無表情だつた。

「あなたと同じだからです」

一瞬理解できなかった。だが説明されなくとも、妙に納得できた。

つまり、あの少年は。

俺の表情をどう受け取つたのか、説明は続く。

「お気づきかもしれませんが、あの少年は私の弟です。いえ、弟でした。おとし亡くなりました。あなたの妹さんと同じような、特筆すべき点のない事故です」

男には後悔が見えなかつた。悲しみはあるかもしれない。しみじみと、ああ同じなんだなと思つた。

「ところがちょうど一年前、どういうことか生前の姿で現れました。そして私は理解しました。死者を实体として呼び出すこれは、私の能力だと」

少年に戻つたということは、一度に呼び出せるのは一人だけなのだろう。

その能力について詳細には言及しなかつた。答えられないだろうし、知つたところでどうにもならない。

「あなたと私はこれへの対応が違いましたが、ひとつ同じ共通点があります。理由はうまく文章にできないのに、間違つていると思つていることです」

俺は既に返事をしようとしていなかった。

「なので、このような格好で、ちぐはぐな発言をしているのです。現状がおかしいものなのだ、意識し続けるために」

冷蔵庫から適当なレトルト食品を取り出す。

今日はもう疲れた。早くシャワーを浴びて寝てしまおう。

一人しかいない部屋を見る。以前からこうだったのに、急に寂しさを感ずる。

死んだ人間が生き返るなんて、馬鹿げているし、間違っている。でも、どう間違っているのかについて、私たちは説明できないのです。

あの男の言葉を思い出す。

だから私は、弟が生き返ったと素直に喜ぶようになったらおしまいだと思っただけです。この状況はおかしいのだと自覚するため、いろいろな習慣も作りました。

彼はあまりに俺と同じだった。最初に会ったときの挨拶はそのためだったのだ。

いつそ忘れてしまおう。

俺には忘れている状態、考えていないときが正しいように思えた。

了

夢か現か

さん

まぶた
 瞼の裏に、強い光を感じる。——またか。少女はそう思いつつ目を開き、覚醒する。これで何度目の夢だろうか。感覚や意識がはっきりしていることを確認し、そのまま身を起こす。やたらと太陽が眩しい、雲一つない青空を眺めていると、少し離れた場所から轟音が響いてくる。すぐに振り向き、街、というよりは村という表現が正しいような規模の集落から煙が上がっているのを見つめる。ああ、今回の夢は早く終わりそうだ。そんなことを考えつつ、村へ向けて走る。

その頃、村では、大勢の村人が巨大な龍から逃げ惑っていた。そんな中、大剣を持った少年が、たった一人で龍と戦っていた。

「くそっ……」

少年は龍の猛攻を受け止めるだけで精一杯で、反撃をする余地がない。軽く斬撃を当てることはできるが、すべて強固な鱗に阻まれてしまう。弱点である喉に全力の一撃を加えれば倒せると少年は理解しているが、その余裕がない。

（せめて、何かで気をそらせたら……!）

少年がそう考えたとき、龍の側面に光球が数発当たり、不意打ちに龍が大きく体勢を崩す。龍は怒り狂い、光球を放った存在を睨みつける。が、その隙に、龍の喉を大剣が貫き、龍は一瞬にして絶命する。

少年は龍の喉に刺さった大剣を抜き、崩れ落ちる龍の亡骸を見つめつつ、近付いてきた少女に声をかける。

「助かったよ。あのままじゃ、多分やられてた」

少年の感謝に対し、少女は表情を変えず、無感動に応じる。

「いえ、ドラゴンが体勢を崩したとき、すぐにあなたがとどめを刺してくれたから、さつさと片付きました。ありがとうございます」
 感情を交えずに話す少女に、可愛げがないなあと思いつつ、さらに言葉を重ねようとしたところで、周りの村人たちから歓声が上が

る。
 「おお……ドラゴンをいとも簡単に!」「なんてことだ! しかも、たった二人だぞ!」「あ……ありがとうございます! おかげで、この村は救われました!」「別世界の勇者よ! 助かりました!」
 「あなた方は我々の英雄だ!」

凄まじい歓声を、少年は少年は頬を赤くし、苦笑しながら、少女はやはり無表情で受け止める。少しして、村長と思われる人物が二人に声をかける。

「いや、助かりました。本当にありがとうございます。もし良ければ、あなたたちを讃えて、村全体で祭りをするのですが、ぜひ……」

「その申し出は断らせてもらいます。私は、することがあるので」
 村長の言葉を遮り、少女が発言する。その少女の反応に少し驚きつつ、少年も、

「申し訳ないですが、俺も……。性分に合わないもので」

と、断りを入れる。二人のその反応に、村長が呆気に取られる。

「な……ど、どうしてもですか?」

「どうしても、ですね。すみません」

村人たちの歓声は収まり、村長も残念そうにしながら、
 「そうですか……残念ですが、仕方ありません。しかし、あなた方は、この村の危機を救って下さいました。そのことに関しては、本当にありがとうございます」

と、深く頭を下げ、改めて感謝を告げる。その後、村人たち全員に見送られ、少年は手を振りつつ、少女は振り向きもせず、村の危機を救った二人の英雄は、旅立っていった。

少女は、少なからず驚いていた。恐らくさつききの龍退治が自分のすべきことで、それが終わったのだからあとは夢から覚めるだけだ。なら、祭りなどに参加している暇はないだろう。そう思っ出てきたのだが、この少年まで一緒に着いてくるとは思ってもいなかったのだ。しかし、少し気になっていたこともあったので、問いかけてみることにする。

「先程、村人たちから、別世界の勇者と言われましたが、あなたも別世界から来たのですか？」

いきなり話題を振られたことに戸惑った様子を見せながらも、少年は問いに答える。

「まあね。いくつもの世界を旅して、あんな風なことをしてる。あなたも、つてことは君もそうなのかい？」

「ええ、といつても、あなたとは少し事情が違いますけど」

「ん？ それってどういうことだい？」

「私は、夢を通じて、別世界に関わっています。なので、今いる私は、夢の中の存在なのです。だから、今回のようなことも、本当に別世界であった事実なのか、それとも、私の夢の中の空想なのかは、分からないのです」

そう言ったら、やはり少年は驚いた表情をした。しかし、すぐにもとの表情に戻り、

「へえ、そうなのか。でも、もしかしたら、寝てる間に、君の身体ごと別世界に移ってきてるのかもしれないぜ？」

と、得意な顔をして言ってみせた。なるほど、そんな解釈の仕方もあるのか。意表をつかれ、少し表情が変わったのだろう。いたずらが成功した子供のように、彼の頬が緩んでいる。だが――

「それは、ありえませんか。私が一番、分かっています」

「そう言いきれるのは、どうしてなんだ？」

「それは――いえ、秘密におきましょう。あなたとは、再び会いそうな気がしますから、また、そのときに」

残念そうに、しかし、眩しいほどに目を輝かせて、彼は再会を誓った。その様子に、自然と笑みがこぼれてしまう。

「ふふ。では、私はこの辺りで。二度目の出会いを、楽しみにしておきます」

「ああ。必ず、会いに行つてやるからな」

その言葉を最後に、少女は歩いていく。子供のようなのに、どこか惹きつけられる、不思議な少年に再び出会うために。

少女が歩いていったあと、少年は堪えていた。が、少女が見えなくなつて少しすると、堪えきれなくなつたのか、狂つたように笑い声を上げる。

「ククッ……クハハハハ！ まさか、気まぐれに人間を助けてやつたタイミングで、面白そうなやつと出会えるとはな！ やつぱり、ただ壊しまくるだけじゃダメだな！ あのトカゲを手を抜いて相手して良かったぜ！ ハハハハハ！」

狂つたように笑いながら、少年は少女が行つたほうとは逆の方向に歩き始める。

その表情は、新しいおもちゃを見つけた子供のように輝いていて、同時に、ひどく残酷で。

「ククク、あいつの体が寝てる世界に行つて、世界ごとブツ壊してやるんだ。ああ、あいつはどんな顔をするかな？ 楽しみだなあ！」

その言葉を最後に、少年は歩いていく。無表情だが、それ故にとてもきれいな表情を一瞬だけ見せる少女に再び出会うために。

少女は歩く。少年は歩く。たつた一度きりの再会のために、真逆のほうへ。

さて、この一瞬の逢瀬は――夢か、現か。

天上の愛

タニイム

「……」

気がつくくと、一面真っ白な場所にいた。ここはどこだろう？

たしか、自分は今日もいつも通り学校から帰って、最近買ったラノベを読んだり、ソシヤゲしたりしようとして……。

少しずつ思い出してきた、今日は少しアイデアが浮かんだから、執筆しようとして……。

「ご、ごめんさい！」

突然聞こえてきた声に驚いてそつちを向くと、自分より年下に見える女の子が、頭を下げていた。かわいい。髪は伸び放題だし、服もかなり着古されてるといふか……身だしなみに気を遣うような余裕もないって感じがする。それでもかわいいから不思議だ。

「どうしたの？」

とりあえずそうたずねると、彼女は泣きながらこの場所について説明してくれた、それをもとに、分かったことをまとめると。

彼女はこれでも最高神らしいということ。

ここは転生の間とか呼ばれている場所で、どうやら僕は死んでしまったらしいこと。

死因はデスクワークに追われた彼女が、僕の資料に飲み物をこぼしてしまったことらしいということ。

ここでは、転生する前に、転生するときによくあるチートを体験することができるらしいこと。

元の世界では僕の存在はなかったことになっているらしいということ。グッバイ設定、グッバイ作品、グッバイ黒歴史。

そして、彼女がめっちゃくちやかわいくて、僕と年齢が同じだということ。これが一番大事だ。僕が死んだとか、転生だとかなんてどうだっていい。このことに比べたら、ほとんど価値がないといって

いい。

彼女は、説明を終えると糸が切れたように倒れこんでしまった。今は、僕が彼女を抱きかかえている形になる。フワツといい匂いがした。かわいい。にしても軽すぎる気がする。よく見たら顔もやつれてるし、よほどひどい目に合ってたんだらう。

現代日本なら、こんな違法労働は速攻で捕まるだろうけど……ここでは、そうはいかないらしい。出る杭は打たれる、ならぬ、出る杭は切り倒されるつてところかな？ 女の嫉妬は怖いってよく聞くし。

とりあえず、自由に試せる特典で、転生物でよくある生産チートと、素材を生み出すような能力と、食事も睡眠もなしで活動できる能力と……今はこれでいいかな？

転生か……多分彼女とは離れることになるんだよな。離れたくないな……つて何考えてんだら僕。

とりあえず彼女を支えながら布団でも作ろうかな……それと、キッチンとかベッド、調理器具とかも作るところか、さてと、やることはたくさんあるし、頑張らないとね！

……なかなかいい感じのベッドもできたし、彼女をそつと寝かせてつと、安静にしておかなきゃね。

さて、次は……。

「ん？」

机の上に来るまで何かで溶かされたみたいな紙切れが置かれている。

これは……ポロポロで読みづらいけど、この紙に書かれているのもしかして、僕？

さっきの彼女の話とも一致するし、たぶんそうなんだろうな……。ということとは、こつちの倒れてる飲み物の容器みたいなのがこの状況を作り出した原因だろう。

まずはきれいに掃除したほうがよさそう？ ついでにこつちも片付けとこうかな。

準備しとくぐらいなら、いいよね？ つて誰に言ってるんだろ、僕。

今、ここには僕と彼女しかいないのに……もし見てるやつがいるとしたら、ヘタレとでもどうとでも呼べばいいさ。こういうことには個人差があるんだ。つて本当に何言ってるんだらうな……。とかなんとかやってるうちに、あらかた片付いたかな？ そろそろキッチンとか調理器具作り始めようかな？

※

「う、うーん、あれ？」

お、起きてきた、やつぱり疲れていたのかな？

「大丈夫？」

「ふえっ？ えーと、あなたはあのときの……」

「起きてすぐだけど、おなかすいてない？ おかゆ作ってるけど、食べる？」

今思っただけど、これって餌付けに入るのだろうか。

くきゆるるゝ

かわいい音が聞こえた。おなかはすいているみたいだ。

「い、いただきます……」

「どうぞ、めしあがれ」

顔を真っ赤にして恥ずかしがっててかわいい、本当にかわいい。

「ごちそうさまでした」

カラツ

「お粗末様でした。おいしそうに食べてくれてうれしいよ」

「あううう……」

ポフツという音が聞こえそうな位顔を赤くした彼女は、ポカポカという擬音が似合いそうなほど可愛らしく叩いてくる。

しばらくして、落ち着いてきた彼女は山積みの仕事載っていた机に目を向けた。

「……あれっ？」

机の上に載ってあつたはずの仕事は、きれいに片付けられていた。

「今まで大変だったでしょ？」

僕がそうたずねると彼女は申し訳なきように、

「ありがとうございます」

といった。

「気にしないで、だいじょうぶだよ」

彼女にそう言つて、僕はなぜこうなったのかたずねてみた。

なんでも、生まれた時から少し力が強くて、周りから期待されていて妬まれたらしい。やつぱり嫉妬って怖い。でも、彼女が何者だつて関係ない。

「心配しないで、僕が君を守るから」

そう言つて、一つの箱を取り出した。

「ふえっ!？」

聞こえたみたいでよかった。にしても、こんな時の反応までかわいい。

「貴女のが好きです。年齢的にまだ早いけれど、これを受け取つてもらえますか？」

そう言つて、開きながら差し出した箱の中には、キラリと小さな輝きが一つ。

「はい、喜んでお受けします……!」

やったー！ 受け取つてもらえるか少し心配だったんだよね。

とりあえず、これで晴れて僕は彼女と共に暮らすことになった。

僕と彼女の甘く、幸せな日々は、まだ始まったばかりだ……。

了

月夜の嘘

えのぐふで

「知ってるか、僕は実は宇宙人なんだ」

「……」

私はおそらく、今世紀一番の冷めた目をしていただけだろう。

「なんだなんだ、そんな怒っているのか蔑んでいるのか悲しんでいるのか喜んでいいのか分からないような微妙な表情をしておつてからに。僕が何か酷いことをしたかい？」

「いえ、酷いことはされていません。あなたがただただ酷いだけです。あと、喜んではいません」

夏に比べると日の入りもだいぶ早くなってきた。教室に差し込んでいた陽の光はほとんど息を潜め、わずかに残った光だけでは本を読むのも厳しくなってきた。葉を挟んでぱたりと本を閉じ、帰る準備を始める。今日はお母さんに買い物を買って頼まれているのだから、早く出なければ。

「えーつと、卵と牛乳と……」

「おいおいおいおい、ちよつと待ちたまえ我が後輩。そそくさところから立ち去ろうとするんじゃない。それだけスムーズな流れで帰ろうとされると、まるで僕が最初からここに居なかったようにやらないか」

「あ、もうすぐ特売の時間が始まつちやう。早く行かなきゃ」

「ちよつと待って、マジで待って、話だけでも聞いてお願い」

正面に回り込んだ私の先輩、四ヶ谷紗郭は恥も外聞も無く土下座を敢行した。いや、敢行というより愚行だが。

うちの学校にはオカルト研究部なるものが存在している。ただ、部員が少なすぎるうえに勧誘もあまり活発に行わないため、存在を知らない生徒もちらほらというほどだ。私と先輩はその数少ない部員だ。

「何なんですか、私は早く出発して買い物に行かなければならないんです。早くしないと真つ暗になってしまいます。女子高生が夜道を歩くのは危ないじゃないですか」

「いやまだ思いつきり明るいぞ」

「いいえ、秋の日の入りは意外と早いですよ。すぐに暗くなつてしまいます」

「いや、普通に夏なんだが……」

「ちつ」

「君今、先輩の突つ込みに舌打ちをしたね？ 何言つてんだこいつと言わんばかりに毒をかみ殺すような舌打ちをしたね？」

読者まで巻き込んでついた嘘があつさりばれてしまった。いったい何がいけなかったのだろう。演技が下手だったのだろうか。

「いや、普通に無理があるだろう。どうか読者つてなんかない」

「いえ、こちらはお話です。否、こちらのお話です」

これはすぐに帰ることはできないだろう。私は手に持ったカバンを一旦下ろし、改めて先輩に向き直った。

「ええ、認めましょう。今は夏真つ盛りで、日の入りまではまだ全然時間があります。親に買い物を買って頼まれてなんかいませんし、卵の特売セールもあります。すべてが真つ赤な嘘でした。で、そんな私に一体何の用ですか？ 我がオカルト研究部部长、四ヶ谷紗郭先輩」

「あつさりと言き直つたね。まあ、それでこそ君というものだよ、

我がオカルト研究部副部长、ふちぞめみつか 洲染蜜花君」

「いつから私が副部长になつたんですか」

「おや、嘘があつさりばれてしまった」

全く、先輩に平気で嘘をつくとんでもない先輩だ。とても尊敬できない。

「その言葉、僕にも君にも刺さつてるよ」

「そうですね。ずぶずぶです」

※

「さて、先輩が実は宇宙人って話でしたっけ？」

「いや、あれは冗談。本題はもっと別のことだ」

「あれも嘘なんですか……」

「本当、一日だけでも正直に過して欲しい。迷惑な先輩だ。」

「で、いったい何の用ですか、先輩。用がなければ私は普通に帰る気でしたんですけれど、それを止めてまで何をしに来たんですか？」

「いやあ、君が部室に来れば話は早かったんだが、今日に限って来ないものだから探してしまった。本当はもっと早く言うつもりだったんだけどね。君が教室にいるせいで遅くなったんだよ。つまり君にも責任の一端がある」

「気を取り直して私は、目の前でトンデモ理論を展開する先輩から本題を聞き出すことにした。帰りたいのは本当だ。」

「よくぞ聞いてくれたね。では教えようじゃないか。いやいや、ようやくオカルト研究会がらしくなるときが来たよ」

「先輩はにやにやと得意顔を浮かべている。その表情にはいくらかの自信があるように見える。」

「らしくって、つまりは何かオカルト的な物を見つけたってことですか？」

「こ名答」

「こ名答って……。とてもじゃないけど信じられませんよ。そんな非科学的なもの、普通はありえないんですから」

「……君、ホントにうちの部員かい？」

「私は貴方たちを否定するために潜入した、いわばスパイなんですよ」

「なんだって？ それは大変だ。最優先で会議を開かなければ」

「嘘ですよ」

「どうかそこは私を優先している場合じゃないだろう。大発見の優先度が低すぎる。」

「まあ冗談はさておいて、僕が見つけたって言ってもチラッと見ただけって訳じゃあない。確かにはつきりと、それがあると確信したんだよ」

「……何だか変な言い方ですね。どういう意味ですか？」

「まあ僕はここで教えてしまってもいいんだが、折角なら生で君に見てもらいたいんだ。やはり信じてもらうためには、直接見てもらうのが一番だからね」

「写真とかはないんですか？ ちゃんと分かる程度には見たってことは、写真を撮る時間ぐらいあつたとおもうんですけれど」

「この場で終わる話かと思っていたが、なんだか長くなりそうだ。この胡散臭い話にいつまでも付き合うのは避けたいところだ。適当に証拠を見て納得した振りでもすれば満足してくれるだろうか。」

「いや、残念ながら写真は無い。撮れなかつたんだよ」

「……私が信じるどころか、興味を持つに足る材料が少なすぎやしませんか？ 証拠は先輩の胡散臭い証言だけ、そんなので私が話に乗ると思うんですか？」

「まあ君がそういうのも無理はない。でも分かってくれ、あの時はどうしても写真を撮れない事情があつたんだ」

「事情？ 何ですかそれ」

「それも見てもらえれば一発でわかるんだよ。だからお願いだ。胡散臭い僕の証言を信じてみてくれないか？」

「たまにどうでも良い話をしに来る先輩ではあるが、今回はやけに真剣な顔をしている。嘘をついているようには、とてもじゃないが思えない。」

「うーん、どうしようかな……」

「九割九分嘘だと思っていたが、少しづつじわじわと、興味がわいてきている自分がいた。」

「……よし、決めた。先輩、卵で手を打ってあげましょう」

「卵、というと？」

「私が先輩の話に乗る代わりに、近所のスーパーで卵を二パック買

つてもらいます。セールこそやっていませんが、必要なのは本当なので」

「瀏染君、ありがとう。必ず君を退屈はさせないよ。卵もなんなら五パックほど買ってやってもいい」

「その言葉、嘘じゃないですよね？」

「ああ、本当だ。神に、否——今夜の満月に誓おう」

珍しく格好いいことを言う先輩に、私は少し驚いてしまった。

「……で、私はどうすればいいんですか？ 一体どこに行けば、先輩の言っていたモノが見られるんですか？」

「ああ、今日の夜、……まあ八時頃でもいいか。近所の山の上に行く。僕が迎えに行くよ」

スマホでなにやら調べものをして、先輩は私に予定を告げる。

夜八時。女子高生が出るくには中々危ない時間帯だ。

「ええ、分かりました。待つてますね」

「ああ、頼む。女の子が一人で出歩くのは危ないからな」

「そう思ってるならそんな時間に連れ出さないでほしいんですけどね」

「それは無理だ。こちらにもやむにやまれぬ事情がある」

「そうですか」

何だろう、夜にしか現れないようなものなのだろうか？ 少しだけ危険な予感がしてくる。

「まあ、分かりましたよ。それで見られるならそれでいいです。……ところで、その発見したモノっていうのは、一体どんな特徴があるんですか？ 何の前情報も無しに見に行っても、分からず見過ごしてしまうかもしれませんし」

「僕がいるんだから、そんな心配はないと思うが……。まあいいか、それくらいは教えてもいいだろう。いや、特徴というより、名前で言った方がこの場合は分かりやすいかな？」

「名前？ そんなにポピュラーなものなんですか？」

「ポピュラーもポピュラー、聞いたことのない人はほとんどいない

と思うよ。名前さえ聞けば大体の想像はつくだろうさ」

私はそこまで心霊などに詳しいほうではない。よほど名の通ったものなのだろうか。

「なるほど、じゃあ名前を教えてください。それは一体何なんですか？」

先輩は、少し唇を吊り上げてにやりと笑い、その名前を口にした。

「狼男だよ」

※

草木が生い茂るなか、狭い幅の砂利道を進んだ先には、視界の上で夜空が広がり、下では私の住む町が一望できる山の頂上があった。

昼間は太陽が照って熱かったのだが、今は雲に隠れて月が見えない。今夜は満月らしい。

「うん、完璧だな。予定通りだ」

先輩は空を見上げて、満足げに呟いている。

ここまで来る途中、怪しげな人やモノは一切見ていない。いたとすれば、迷惑な虫だけだ。

「先輩、本当にここを出るんですか？ 来る途中も何もなかったんですけど」

「ああ、まだ出ない。もう少し待たなければね。今はまだ、その時じゃあない。だから目撃する前に、もう少しだけ情報を与えようか。少し座りたまえ」

「いえ、結構です。汚れるので」

「そうかい、それでいいならいいけど」

先輩は心を落ち着かせようとしているのが分かるほどに興奮した様子で、しかしゆっくりと私に話を始めた。

※

「まず狼男というと、君はどういったものを思い浮かべるだろう？」
 「満月をみると狼になる。そういったものだろう。うん、今回僕が確認したのもそういうものだよ。ただ一つだけ、その狼男にはそれと違う点がある」

「彼はね、満月出なくても狼になれるんだよ。最も満月でないと完全な狼男になることはできない。半月や三日月、その程度では中途半端な狼男になる羽目になる」

「僕がそれを確認した日、空に浮かんでいたのは半月だった。つまり、半分は狼男だが、もう半分は人間なんだよ。だから少しは自我があった」

「まあ自我は割と残っていたが、見るところを見れば割と狼だよ。手足はまるつきり獣で、全身の三十パーセントぐらいは暖かそうな体毛が覆っていた」

「今夜は満月だ。つまり完全なる狼男が現れる。おそらく人間としての意識はほとんどないだろう。獐猛どうもうな感情が前面に出てしまう事だろう」

「まあ、かみ殺されないように気を付けた方がいいよ。証拠写真を撮る暇なんてないだろうさ」

「ほら、今まで月を隠していた雲が、だんだん離れていくのが見えるだろう？あの月が現れたとき、恐ろしい狼がその姿を現すことになる」

「さあ、出てきたぞ。うつく——しい——まんげつ——が——」

※

その身体は、瞬く間に変化していった。

手足から鋭い爪が生え、体の末端から美しい毛並みで体毛が全身を覆うように生え始めた。口からは大きな牙が生え、毛だらけの頭の上から耳が生えた。

体が完全に狼と化し、ソレは大きな雄たけびを上げた。

これが狼男——四ヶ谷紗郭の変わり果てた姿だった。

『知ってるか、僕は実は宇宙人なんだ』

昼間の彼の言葉を思い出す。あれはあながち嘘でもなかった。宇宙人ではないにしろ、彼は充分な獣。いや、もはや化け物だ。

「……なるほど、あんな手じゃあカメラも操作できないや」
 どうりで自信を持っているはずだ。彼自身が狼男なのだから。

「グ……グルルル……」

獐猛なその眼が、すぐ傍にいた私を確認するのに時間がかかるはずもなかった。私をとらえたその視線に、思わず足がすくんでしまう。

「はは——。すごいですね先輩。狼男なんて、そうそうなれるものじゃありませんよ。全く、これも嘘だったらしいのに」

これが嘘であれば、嘘で合ってくれたなら。
 私はここで、かみ殺される心配などしなくてもいいのに。

地を蹴った狼は、私にめがけて全速力で飛び掛かり、そして。

「……………あ、ああ、あああああ」

気づいたときには、私の腹は乱雑に食い破られていた。

噛み切られた内臓の一部が体から零れ落ち、体内につまった大量の血液が、勢よく流れ出てきた。足に力が入って来なくなり、その場に崩れ落ちる。

「……はは、本当にうそつきですね……先輩。こんなの……卵だけじゃあ足りないですよ」

本当に、騙されてしまった。卵五パックにこんな重い代償を払わされるなんて。本当、巧妙な詐欺師のようだ。

だんだんと、意識が薄れていく。目は霞み、もはや痛みもなくなってきたしまった。体はもう一切動かすことができない。

狼は肉食獣だ。流れて行けば、私は先輩に食べられてしまうのだろうか。乱雑に肉を噛みちぎって、ゆつくりと咀嚼するのだろうか。

「……まあ、変に死体がのこ……るよりまだ……ましかな……」

もう、言葉も出てこなくなってきた。僅かな視界で、仰向けに倒れる私を見つめる狼の姿が見えた。

もう駄目だ。後はない。こうなればゆつくりとなりゆきに身を任せよう。

とてもいい人生でした。お父さん、お母さん、ここまで私を言ってくれてありがとうございました。これでお別れです。きつと来世では幸せに生きて見せます。立派になります。嘘をつかない人間になります。用心深くなります。危険な場所には立ち入らないようになります。夜中に一人で歩きません。誰かとも簡単には歩きません。人を愛し、人に愛される存在になります。ペットも飼いたいです。かわいい猫など良いでしょう。美しい毛並みを撫でて。ペロペロと舐めてくる様子を可愛がりたいものです。ずっと仲良く暮らしていき、家族のような存在になりたいです。

きつといつか、幸せな人間になってみせましょう。それでは皆さん——さようなら。

——さて、私は今、一体どれだけの嘘をついたのでしょうか？

消

First contact

キツタヌ

気がつけば、貴方は見慣れぬ場所に立っていた。

石造りの大きな部屋らしく柱は見当たらないが、左右に見える壁が柵になっていて、その中は古そうな本で埋まっていた。

少し先に見える十字路の先も同じ様に見える。

どうやら此処は書庫である事が窺える。

貴方は此処へ来るまでの記憶は曖昧だが、この様な所へ来る流れではなかったように思った。

ただ立ち止まってるだけでは何も始まらないと思った時、本棚の影から人影が出てきた。

その者はこちらに気付くと、驚いた顔してから笑みを浮かべながらこちらへ歩いて来た。

その者は白銀の髪を左でサイドテールにしたゴスロリを纏^{まと}っていた。

見た目は女性の様ではあるが、不思議な事に女性にも男性にも感じた。

「やあ。いきなりなんだけれど、キミはいったい何処からどうやって此処に入って来たのかな？ さつきまで此処には私一人しか居なかったはずなのだけれど」

その声は中性的で性別の判断はつかなかった。

貴方は、気がついた時には既にこの場所に立っていて未だ一歩も動いていない事を素直に伝えた。

「んん？ んん？ ちょっと失礼するよ」

貴方はそう言われると手で額に触れられた。

ほんのり暖かい気がする。

「ああ……。うん。理解した」

どこか疲れたような顔から、引き込まれてしまいそうな可憐な笑みに変えると、

「安心して良いよ。キミが招かれざるお客様である事は間違いないけれど、時間が経てば元の場所に帰れるし、此処に居る間に大きな怪我をする事もないからね」

轟音と共に、部屋が揺れた。

天井についていたのだろうか、少しの砂が落ちてきた。

「……大丈夫だよ。ここが崩れるまで後八時間程あるし、それまでにはキミは元居た世界さ」

普通なら激しい不安に襲われたりする場面なのだろうが、目の前の者に「大丈夫だ」と言われると何故か妙に落ち着いてしまった。落ち着くと、どうでも良い様な疑問が湧き上がってくる。

まず、貴方は目の前の者に名前を問うた。

「うん？ 名前？ 私のかい？ んんそうだなあ……」

悩んだ様に周りを見渡してから

「ラフル。なんてのはどうだい？」

どうだい？ と訊かれても。と困惑する貴方。

「私には中々に良い名前を考えて付いてしまったね」

漫画などでは、ふふん♪とか書かれてそうな程に上機嫌のご様子だ。

疑うまでもなく偽名ではあるが、何か事情があるのかもしれない。貴方はそう納得する事にした。

次に、貴方はラフルに性別を問うた。失礼だとは思いつつも、どうしてもこの不思議な感覚はもどかしい。

「性別？ そんな事を訊かれたのは初めてだなあ」

本当だろうか。もしかすると、この感覚に陥っているのは自分だけなのだろうか。と悩んだ貴方ではあったが、他の人は訊く事を躊躇^{ためら}

踏^おつたりしたのでらう。と自分自身に言い聞かせた。

「でも、そうだねえ。分らない事は分らない。不思議な事は不思議のままが良い事もあると思わないかい？」

「どうやら、教えてくれる気はないらしい。」

「ふふっ。そんな可愛い顔してもダメだよ。キミには性別は教えな
いって決めちゃったからね」

「教えてはくれないが、触れてはならない話題。と言う訳でもなさ
そうだ。」

「名前より先に訊かれていたら答えてたと思うよ。名前はあつた方
が良いから後から聞かれていても答えていただろうなあ」

「いたずらつ子のように流し眼で囁^{ささ}惑^{わく}な笑みを浮かべて貴方を見るラ
フル。」

「私とお話しているのも良いけれど、せっかく此処に来たんだから
何か読んで帰りなよ。キミが帰って、私も帰れば此処にはもう誰も
訪れない。此処にある本は二度と誰にも読まれる事が無くなる。こ
の世界が終る迄に此処にある本を目にするのはキミと私が最後だ」

「ラフルは泣きそうな顔で続ける。」

「悲しい話ではあるけれど、これは仕様が無い事。本来来るはずの
なかったキミが此処に来る事が出来たのは、崩れる前にお別れをし
に来た私が居たからに他ならないからね。いやあ、さすがに私も定
めに割り込む事で、こんな不具合が出るとは思っていなかったけど
ね。まあ良いエラーだったと思うよ。此処にある本たちは、もう長
い間誰にも触れられていなかったね。本当に、長い長い間……」

「人の泣き顔を眺める趣味も無い貴方はラフルにオススメの本はあ
るのか問うた。」

「なんだか気を使わせちゃったみたいで、ごめんね。うん。オスス
メかあ……あ、そう言えばアレがあつたはず……ちよつと待ってて」

「そういつて嬉しそうな顔で走って行くラフル。
ラフルの好きな作品なのだろうか。」

しばらくしてラフルが持ってきたのは、千五百頁程の一冊だった。
「これなんかは物凄く面白いよ！　なんてつたつてあのヴィルボー
夫人の作品なんだからね！　まあキミが知ってるはずもない人物
なのだけれど。これはヴィルボー夫人の処女作の原本なんだ。今、
値段を付けるとしても、この世界で過去未来のなかでも一番の国庫
を空にしても全つ然足りないよ。この作品はヴィルボー夫人も特
にお気に入りだつて生前に言っていてね、ヴィルボー夫人の最後の作
品はこのリメイクなんだよ。リメイク版はヴィルボー夫人の最高
傑作とも言える作品でね。初めて読んだ時は本当にもうヤバかつた
よ！　言葉なんかじゃ表現しきれないし、色々な感情がごちゃ混ぜ
になつて一筋の涙になる。みたいな」

最後のはよく分らなかつたが、とにかくラフルはヴィルボー夫人
の作品が好きだ。と言う事は理解出来た。

「この時のヴィルボー夫人の作品はね、趣味で書いていらした作品
を自費出版してた物で拙さがいっぱいあるんだ。私はそれが好きで、
ヴィルボー夫人の作品で一番何が好きかつて問われたら迷わずにこ
の作品を挙げるんだ。まあ、読んでみてよ。はい」

「ラフルはその本を貴方に渡す。」

「貴方は、その表紙を見て固まる。」

「何と書いてあるのか読めないのだ。」

「貴方が戸惑つてる事に気付いたラフルは、不思議そうな顔した後、
「ああ！　そつか、キミがこの世界の言葉を読めるはずがなかつた
ね。ごめんごめん。じゃあ、私が読んであげるよ。この世界の表現
も出来るだけ似た様な意味のキミも知つてそんな表現に言い換える
けど、どうしても出来ない様なものは説明するから頑張つて理解し
てね。向こうに椅子と机があるからそこまで移動しようか」

※

話の流れはこうだった。

主人公であるルルーナは侯爵令嬢で第一皇子と婚約を交わしていた。

ルルーナ達が王立の学園ですごす最後の年、その年の半分を過ぎた頃ルルーナは第一皇子に協力を仰いだ。

端的に言うと、婚約破棄の演技を頼まれたのだ。

ルルーナは非の打ち所のない人物だと知られているが、彼女には誰にも打ち明けた事がない彼女自身が欠点だと感じている事があつた。

それは、男を異性として見ると激しい嫌悪感に襲われると言う事。友人として接する分には不思議と問題はないのだが……。

それは、物語の中に登場する人物の殆どにも適応される。が、中には嫌悪感を感じない者達も居た。その登場人物達の共通点は、

『獣の特徴が容姿に強く表現されている』

と言う事。耳と尻尾だけ付いているだけなどは言語道断だ。

鶏が先か、卵が先か、どちらなのかは今となつては分らない事であるが、

彼女は重度のケモナーになっていた。

ルルーナは嘘の婚約破棄を本当の婚約破棄にしようと考えた。

結果を言えば成功。彼女は勢いに乗って家を出、旅人になって逃げ出した。彼女の趣味は、辺境にある叔父の領地にて無断で行うサバイバル生活であつた。

そして数年が過ぎ、彼女は運命と出会う事になる。

雪の降るある日、その日の夕食の為に狩りをして、燃やせる物を探していると彼女は豪邸を見つけた。一番近くの集落でも馬で五日

はかかる場所。辺りには樹が生い茂っていて、ここに来るための道らしいものは見つけることがなかった。

驚いた事にそこには住んでる者が居た。

其れは果たして人が獣か、身長は二メートル程で、身体に赤黒い体毛を纏い、見てしまった者を意識刈り取つてしまふ程にギラついた瞳、無駄のなく洗練された筋肉、頭部で存在感を放つ捻じれた双角、初めて見た時は未発見の魔獣かと警戒したルルーナではあつたが、館に招待されてしまったので大人しく乗り込んだ。

一目惚れであつた事は言うまでもない。

因みに、その者の名をオーウエン。オーウエンはその国の古くかある由緒正しい貴族だつたらしい。過去形なのは異形の姿を持つた子、つまりオーウエンが産まれた事がバレてしまったから。一族もろとも皆殺しにされそうになるも、命からがら逃げ出す事が出来たらしい。赤子だつたオーウエンを連れ此処まで逃げて来た者達は皆、数年前の流行り病で亡くなつたと言う。

オーウエンが獣の特徴を持つて産まれたのは、数十代前の家長に領地経営が恐ろしく下手な者が居たらしく、いづれ呪われた子が産まれる事を代償に、まじないで持ち直したらしい。子にかかる呪いもたいした物ではない事を理解していたからこそ実行に移したそうだが、解呪の方法が長い年月で人々の知識から失われたのだと言う。むかしのひとはすごかつた。

その後、紆余曲折。

二人は愛し合う関係に至つたのだが、愛を確認し合つた瞬間、オーウエンの姿が人間の姿へと変わった。

オーウエンにかけられていた呪いの幾つかある解呪方法の一つを偶然にもその境遇と、ルルーナとの日々で満たしたのだつた。

ルルーナは人になつたオーウエンを見て、思ひの丈に比例するかの様に、えもいわれぬ嫌悪感に襲われた。

「ごめんさい。貴方はとても良い人だと思うのだけれど、生理的に

無理。個人的な感想だけれど、貴方つてば私が婚約してたイケメン皇子サマより良い顔してるから私みたいな奇人相手じゃない限りは好きになつた子を落とせるわよ」

つい先ほどまで愛称呼びだったのに、名前を呼ばないルルーナは走って逃げた。慣れていない人の姿でも獣の姿の時と同じ速さで追いかけてくるオーウエンに遠慮もなく攻撃しながら。むしろ、親の仇かの様に苛烈な攻撃であつた。

※

「ね？ 面白かつたでしょ？ 中盤の吸血鬼の場面とか臨場感が凄
いよね」

ハッピーエンドかと思つたのに想像の斜め上を攻められた作品だね。とは言えそうにない笑顔をするラフル。

「あ、最後が気になる？そこは安心して良いよ。これ、中篇だから」

中篇？

「そう、前篇が、オーウエンが呪いをかけられて産まれる原因となつた数十代前の家長の物語。中篇が、ルルーナとオーウエンの出会いの物語。そして後篇が、二人が結ばれるまでの物語だよ。ルルーナが人の姿を愛せる様になるのか、オーウエンが獣の姿を得る方法を見つけるのか、はたまた別の結末なのか、それは今から読む後編で——残念。もう時間みたいだね」

良い笑顔から一変、悲しそうな顔になるラフル。時間とはどう言う事だろうか、と思う貴方は自身の身体が薄く月白に発光している事に気付く。小さな光が身体から浮いて行く。

「そうだねえ……うん。前篇中篇後篇の三冊は私が持って帰る事にするよ。なに、数時間後には瓦礫に埋もれてしまう今は無き国の隠し通路兼書庫から持って帰つたつて誰にも怒られやしないよ。もし国が未だあつたとしても、持って帰つて怒られる事はないだろうけど」

じゃあ、また会おうね。

うん？ また会えるのかつて？そこは心配しなくても良いさ。

次もまた、こんな感じに唐突なのか、今度は時間に制限がないのかは私にも分らないけれど、キミと私は再開するよ。間違いないね。

それじゃあ、お元気で！

See you again?

たつた一つの願い事

若葉

俺の幼馴染は中二病だ。自分のことを女神だといひ、一億人の信者がいるという。

今日も大きな声で布教活動に動んでいる。

「私は女神様よ！ もっと敬いなさい！」

「こら、またお前か！ 毎日毎日飽きもせずよくもまあ大声で恥ずかしいことが言えるもんだ」

「恥ずかしいことつてなによ！ 私は本当に女神様なのよ！」

「わかつたから静かにしろ！ 授業中だぞ！」

「やつとわかつてくれたのね……。つて、もうその手にはかからないわよ！ いつもそう言ってるけど、全然信じてないでしょ！」

「ソラ、恋人なんだからお前がなんとかしろ」

何を言っても無駄だと判断した先生は俺に面倒ごとをぶん投げる。いつものことだ。そこで俺はいつものようにこう言うのだ。

「カナエ、後でお菓子やるから、あと三十分だけ大人しくしてろ」

「ホント!? わかつた、静かに布教するわ」

先ほどまでの騒がしさが嘘のように、教室が静寂に包まれる。先生は満足し、授業を再開する。いつものパターンである。

「ソラ、お菓子はどこ？」

「今日はアイスだ」

「冬なんだけど……。しかも溶けてるじゃない……」

「冗談だ。ほら、チョコレート」

「ありがとう！」

差し出した板チョコをカナエはすぐさまひつたり、端の方を折る。そしてそれを俺に差し出した。

「ソラの分」

「ありがとう」

元はと言えば俺が買ったやつだし、割合がひどい。しかし、これでも優しい方だ。俺以外だったら分けるなんてしない。カナエは女神を名乗るだけあって可愛いが、態度が尊大で図々しいため、全女子生徒から嫌われている。逆に男子学生からの人気は高いが、それが余計に女子生徒たちを不機嫌にしている。

しかし、いじめはないし、カナエに言い寄る男子はほとんどいない。というのも、俺とカナエが親公認の恋仲である（と思われる）ため、皆諦めているのだ。先生方はおろか町内でも既に有名であり、誰かとすれ違う度に

「式はいつ挙げるんだ？」

などと言われるほどだ。

しかし、これだけは言わせてほしい。

告白された覚えはないし、告白した覚えはない。

気が付けば外堀が完全に埋まっていて、否定しても照れてるだけだと思われるため、黙っているだけだ。受け入れてなどいない。

別にカナエが嫌いなわけじゃない。女神を自称する点を除けば、可愛いし家事も頑張ってるし健気で良い子だ。

しかし、俺はカナエが思っているような人間ではない。成績も運動神経も平均レベルで、これといった特技や趣味があるわけではない。良くも悪くも普通なのだ。アイドル業界でもやっていけるであろうカナエの横に立つなんて到底無理な話だ。

そのくせ何か努力をするわけでもなく、ただ漠然と毎日を生きている。

「ソラ、どうかした？」

どうやら深く考え込んでいたようだ。口の周りをチョコで汚したカナエが俺の顔を覗き込んでいる。

「いや、なんでもない」

「ふーん。困ったことがあつたらすぐに言つてね。女神パワーで解決してあげるから」

「女神パワー、ねえ」

「疑つてるでしょ？ ちよつとずつだけ貯まつてきてるのよ？」

ソラのお願い事を叶えるためにね」

「そうなのか。初めて知つたぞ」

「初めて言つたもの。というか、昔約束したじゃない」

「昔のことはよく覚えてない」

「そうなの？」

「そうなの」

小学生の頃の記憶はほとんどない。当時のことを思い出そうとしても、はつきりとは思いつけない。カナエのことも、高校に入つて同じクラスになつたことでもようやく思い出せたほどだ。

「その約束ってなんなんだ？」

「『次に会えたら、ソラの願い事を何でも一つだけ叶えてあげる』よ」

「へえ」

どういう状況になればそんな約束ができるのだろうか。というか、そんな昔から女神を名乗つてたのか。

「だから、ソラが願い事をしてくれるのを待つてるの」

「願い事ねえ」

俺が思うに、願い事というのは誰かに叶えてもらうものではない。人にものを頼むときにお願いという言葉が使われるが、ぶっちゃけ気に入らない。

まあ、だからどうしたという話なのだが。

「まあ、保留で」

「ふーん。まあいいけど。ずっと待つてるからね」

「告白か？」

「そうだよ」

「そっか」

いつも通りの他愛もないやり取り。カナエの方は知らないが、俺は冗談のつもりで言つている。

放課後。

特にすることがない俺は、荷物を片手に教室を後にする。すると、後ろからカナエがついてきた。

「一緒に帰りましょう？」

「信者はいいいのか？」

「正直なところ、ソラ一人で十分なの」

「そうなのか」

「そうなのよ」

断る理由はない。

校門を出てまっすぐに家へと進路を向けると、裾が引っ張られた。後ろを見ると、カナエが原因のようだ。

「どうしたんだ？」

「今日が何の日か、覚えてる？」

今日は祝日ではないし、俺の誕生日ではない。

「いや、知らない」

「そうだと思つた。今日はね、私の誕生日であり、ソラと出会つた日よ」

「そうなのか」

「そうなのよ」

カナエの誕生日か。プレゼントでも欲しいのだろうか。

「じゃあ何か買つてやるよ。何がいい？」

「時間でいいわ。早速行きましょうか」

「どこに？」

「私たちの思い出の場所よ」

カナエに連れられるまま歩いていくと、やがて町の中心にある小

さな山についた。舗装されていない獣道を進むと、古びた建物が見えた。その建物はどこか見覚えがある。来た事はないはずだが、知っている。そんな既視感にとらわれている間に、気が付くと建物のすぐ正面にまで着いていた。

「私はここで生まれて、ソラに会ったの。ホントに覚えてない？」

「いや、覚えてないな」

反射的にそう答える。しかし、俺は思い出ししていた。

何歳の頃だったかは覚えていない。けれど、俺は小さいころに山で迷い、そしてこの神社にたどり着いたのだ。

そして、そこで立ちすくむ少女を見つけた。

初めは俺と同じ、迷子だと思った。しかし、少女はうんともすんとも言わず、じっと俺の方を見ていた。

そこで俺は何を思ったのか、少女を連れて山を出ようとしたのだ。まあ、そんな簡単に出られるはずもなく、俺は何故か山頂に来ていたのだ。

「おうちにかえりたい……」

俺が泣きながらそう言ったとき、少女が初めて言葉を発した。

「あなたは、誰？」

場違いな発言に呆気を取られた俺は、笑いながら答えた。

「ソラ。どこまでもつづく、むげんのかのうせいをひめたなまえだつて、ママがいつてた」

国語の授業の一環で知ったことを得意げに話すと、少女は小さく

「ソラ……」

と呟き、そしてすこし笑みを浮かべた。

「いい名前だね」

「そういうきみのなまえは？」

「私は、カナエ。ソラの願い事を叶えたいから、カナエ」

「ねがいごと？」

「うん。なんでもいいよ」

「うーん……。じゃあ、おうちにかえりたい」

「それは当たり前のことだから、お願いとはちよつと違うかな」

「？ よくわかんない」

「じゃあ、もう一度会うことがあつたら、そのときにまた、聞かせてくれる？」

「わかった。やくそくだよ」

「ええ。それじゃあ、またね」

「またね」

確かこんな感じだったはず。はつきりとは覚えてないが、大筋は合っているはずだ。

「そっか……」

カナエは悲しそうに言った。悲しませるのは俺の本意ではないが、知らないふりをするのには理由がある。

「初めてだったの。神社に来てくれたのもそうだし、私が見えた人もソラが初めて。信仰心が薄れていって、神社を管理する力もなくなつちやつて……。このままじゃ消えちゃうつてときに、ソラが来てくれた。本当に嬉しかった。残りの力を全てソラに使おうつて思った」

「そっか」

「そう。けど、覚えてないんじゃ仕方ないかな」
俯くカナエに、俺はどんな言葉をかけていいかわからなかった。

少し悩んで、やがてポツポツと話し始める。

「これは俺の持論なんだけどな、願い事つてのは自分で叶えるもんなんだよ。だからさ、カナエもその残された力とやらは自分のために使うべきだと思う」

俺の言葉にカナエは頭を上げる。

「カナエは女神なんかじゃなくて、一人の人間だ。俺の幼馴染で、ちよつと中二病みたいなどころがあるけど、純粹で優しい女の子なんだ」

「で、でも……。私、本当はソラの幼馴染じゃないし、学校の生徒でもないし、本当に女神様だし……」

「いや、誰が何と言おうと、カナエは人間だ。だって、そうじゃないと俺たち、結婚できないだろう？」

「え？」

カナエが女神で、俺の幼馴染じゃなくて、クラスメイトでもないことは何となくわかる。たぶん残された女神パワーで色々と誤魔化しているんだろう。けれど、神様と人間では色々不都合なことが起きると思う。

だから俺は、カナエとの出会いは思い出さないし、願い事も叶えてもらわない。

気が付けば好きだった。一緒にいたいと思っていた。だけど、願い事を叶えてもらえばカナエがいなくなってしまう気がした。

俺の願い事を叶えるのは、カナエではなく俺だ。だからカナエには、カナエの願い事を叶えてほしい。

そして、願わくばカナエの願い事が俺と同じでありますように、だなんて。

誰に願うでもなく、そつと胸の内にしまい込んで。

「カナエ、俺と正式に付き合ってください」

指輪はおろかプレゼントの一つもない、頭を下げるだけの告白。

カナエの様子は俺にはわからない。カナエが返事を返したのは、

告白から五分ほど経った後だった。震える声でゆつくりと言葉を紡ぐカナエは、泣いているようにも感じられた。

「こ、こちらこそ、よろしくお願い、します」

人生初の告白は、大成功に終わった。俺はゆつくりと頭を上げ、カナエの様子を窺う。

「お願い、しちゃった」

「カナエの願いは俺の願いだから、問題ないな」

「適当ね、もう」

二人で笑いあう。いつも通りの、他愛もないやりとり。けれど、これこそが俺の願い事だ。

「帰りに指輪でも買っていくか」

「誕生日プレゼントは別で用意しなさいよね」

そうか。今日は俺たちが出会った日であり、カナエの誕生日であり、付き合い始めた日なのか。

「お金ないから、やっぱり明日買いに行こうか」

「まあ、私のせいでもあるし、付き合うわよ。……。あ、そうだね」

「どうかしたか？」

「ううん、秘密。明日わかるから、楽しみにしててね」

「そうか。それは楽しみだ」

俺の願い事は叶った。カナエの力もあるけれど、自分でつかみ取ったものだ。だからこそ、これからの生活に思いを馳せ、二人で笑い合おうと思えた。

次の日。

「残ってる力全てを使って人間になったわ」

「……」

言葉がでなかった。

嬉しさからか驚きからかは、想像におまかせしよう。

了

遺された者

如月 吟

とある喫茶店の中で二人の男女、高宮浩介と榎本サツキは紅茶を片手に談笑していた。

「水族館に誘ってくれて、ありがとう。とても楽しかった」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

二人は水族館デートを満喫してから、この喫茶店に入った。水族館にて、サツキはアクアリウムを優雅に泳ぐ魚達に心を奪われ、イルカのショーでイルカのジャンプの高さに感心し、ペンギンの行進では可愛さのあまり写真を撮っていた。そのころ、浩介は魚に心を奪われていたサツキに見とれていた。イルカの力強い泳ぎに感心したり、ペンギンとのふれあいタイムでペンギンを撫でたりしていた。

「また、誘ってもらっても良い？」

「うん、また行こう。次はどこに行こうか？」

「そうだなあ……」

二人は次のデートの目的地について色々と話合った。遊園地、博物館、動物園など。二人の行きたい場所は尽きることなく出た。

「じゃあ、今度は美術館に行こうね」

「うん。美術館、楽しみだなあ」

周りにはいる客は二人から溢れる甘いオーラを感じていた。しかし、客はそんな二人を温かい目で見守っていた。

「家まで送るよ」

「ありがとう。それじゃあ、よろしくね」

喫茶店を後にした二人は、近くに公園のある道をゆったりと歩いていた。黄色く色づいたイチヨウ並木の道。

「イチヨウが綺麗だね」

「うん綺麗だ」

夕焼けのオレンジにイチヨウの黄色、美しいコントラストが二人の心を奪った。すると、公園からサツカーボールが飛び出してきた。その後ろからはボールの持ち主と思われる五歳くらいの男の子が飛び出した。正面からは車が来ている。

「ッ！ 危ないっ！」

サツキは咄嗟に男の子を庇うように車の前に飛び出す。

「サツキッ！」

直後、サツキは車に轢かれた。アスファルトには紅い水たまりが広がっていった。

「サツキ！ サツキ！」

「浩……ちゃん……。泣か……。な……。いで」

サツキはその一言を伝えると、浩介の腕の中で息を引き取った。

※

サツキが死んで一年後。浩介は近所の花屋にいた。

「すみません」

「はい、なんででしょう？」

「仏花を一つください」

「一五〇〇円になります」

サツキの葬儀の時、サツキの両親は泣いていた。愛する娘が自分たちよりも先に逝ってしまったことに悲しんでいるのだろう。浩介は現実を受け入れられないのか、葬儀中ずつと呆けていた。葬儀中だけではない。浩介はこの一年間、呆けることが多かった。

「ありがとうございました」

支払いを済ませ、浩介は霊園へと向かった。手には墓石と霊廟を拭くための綺麗なタオルとバケツを持って。

花屋から徒歩で十分の霊園。その一角に榎本家の墓がある。浩介はバケツに水を入れ、タオルを濡らすと墓石を拭き始めた。黙々と拭き掃除を行った。お彼岸も、お盆も来なかつた分も含めて真剣に

行った。霊廟も拭き、雑草を抜き、線香に火をつける。

「遅くなってごめん。少し辛くって、ここに来られなかったんだ」

浩介は墓石に向かって話し始めた。あれからどう過ごしていたか、会社での様子、実家から出られるように自炊を始めたことなど他愛もない話を墓石に向かって話していた。

「結局、美術館には行けずじまいになっちゃったな。今度来るときは、美術館の話でも土産にするよ。他にもたくさん写真を撮ってくるから」

どんどんと涙声になる。我慢しようとするが、涙が溢れだした。受け入れられなかった現実を受け入れ、浩介は悲しみに暮れたのだ。それでも、浩介は前を向いた。

「また来るね」

荷物を片付けて、自宅に帰った。涙を流しながら自宅に戻った。

※

あの墓参り以来、浩介はアクティブに活動するようになった。美術館に行つて名画の絵ハガキを買つたり、少し遠くの遊園地に行つてパレードの写真を撮つたり、夜景を見に行つてはサツキとここに来たかったなと感傷に浸るなどよく出かけるようになった。そんな浩介の原動力はサツキにある。墓参りの時の土産話をサツキに聞かせたい。その一心で浩介は立ち直ることができたのだ。

翌年のお盆、浩介は榎本家の墓に来ていた。手には墓石の掃除道具の他に、沢山の写真が詰まったカメラがあつた。

「今年はいろんなところに行つてきたよ」

墓石の掃除を終えた浩介は、昨年と同様に墓石に向かって話し始めた。昨年と違うのは愁いを帯びていないことである。写真には社員旅行の様子、綺麗に色づいた紅葉の庭園、澄み切った沖繩の海など沢山の写真が収められている。そして、墓石に向かって社員旅行で皆が羽目を外しすぎて二日酔いになったことや日本庭園に植えら

れた紅葉の色が美しかったこと、沖繩の海の透明度の高いことなど写真と共に話した。

「サツキとも一緒に行きたかったな」

消え入りそうな声が浩介から漏れる。それと同時に涙がほろりほろりと落ちた。

「やっぱり、一緒に行きたかった」

墓石には蹲る浩介の影が映った。

空がオレンジに染まったころ、浩介は霊園を出ようとした。その

時、他人の墓の前にいる女性の様子を浩介は気になった。

「死んで欲しくなかった！」

女性は墓石に向かって叫んだ。

「ずっと一緒にいるつて約束したじゃない！　なんで、なんで私を置いていくのよ……」

女性は泣き崩れた。なんで、なんでなの、と漏らしながら涙を流していた。浩介は女性に近づいた。

「あの、大丈夫ですか？」

ハンカチを差し出しながら尋ねる。振り返った女性は泣いているせいか目元が赤かった。そして、ハンカチを受け取るとさらに泣いた。それは人目も気にしないように声をあげて泣いた。

「失礼します……」

浩介は女性の背中を優しくさすった。

霊園付近の公園で浩介と例の女性はベンチに腰かけていた。

「これ、どうぞ」

浩介は缶の紅茶を女性に差し出した。

「ありがとうございます」

女性は受け取ると、プルタブを開けて一口飲んだ。蝉の声しか聞こえない公園の中。浩介は女性に尋ねた。

「さつきはどうして、あんなに泣いていたんですか？」

女性は少し俯いた。浩介は聞かれたくない質問だと思い、謝罪の言葉を述べようとした。

「通り魔事件に、遭ったんです」

女性、東雲夏美は彼氏とデート中に通り魔事件に遭い、彼氏が夏美を庇って死亡した。それを聞いた浩介は何も言えなくなった。

「重い話をしてごめんなさい」

「いえ、質問したのは僕の方だから」

重い空気が二人を包む。夏美は浩介に尋ねた。

「あなたは、なんで泣いていたんですか？」

「えっ？」

浩介は戸惑った。榎本家の墓と夏美が泣いていた場所は少し離れた場所にあり、夏美からは浩介が泣いているかどうかはわからないからだ。

「目元が赤くなっているから、泣いていたと思ったんです」

「そう、ですか」

浩介は少し考えた。こんな重い話をして良いのかどうか。しかし、夏美の話を聞いた以上話さない訳にはいかない。浩介は口を開いた。

「……、実は」

話を聞き終えた夏美は涙を流していた。

「それは、辛かったですね」

「ありがとうございます。夏美さんも辛かったですように」

二人の間に沈黙が流れる。あたりは徐々に暗くなっていく。

「もう暗くなります。家まで送っていきますよ」

「あ、えっと、じゃあ、お願います」

二人は家路についた。道中、会話はなかった。

※

夏美と浩介が会ってから一年が過ぎた。恋人を目の前で亡くした二人は、傷を舐め合うかのように一緒に墓参りに行くようになった。浩介は、そのことに罪悪感を覚えた。自分の都合に夏美を巻き込んだこと、サツキを裏切っている感覚に陥っていることで悩んで

いるのだ。そんなある日の夜。

「ここは、どこだ？」

浩介はさつきまで、自宅のベッドで横たわっていた。しかし、気づいたら一面が真白の空間にいたのだ。

「久しぶりだね、浩ちゃん」

浩介の後ろから声が聞こえた。振り返ると、死んだはずの榎本サツキがいた。

「サツキ？でも、どうして……」

「浩ちゃんが悩んでいるから、夢枕に立ってあげたの」

サツキは浩介に向かって微笑んだ。浩介は、涙目になりながらも微笑み返した。

「そっか。夢でも、会えて嬉しいよ」

「私も嬉しい。話したいこといっぱいあるの。でも……」

サツキは言葉を詰まらせた。心なしか苦しそうな表情を浮かべている。

「でも？」

浩介は聞き返した。サツキは悲しげな表情を浮かべながら、浩介に告げた。

「生者と死者が会える時間は短い。だから、私の本心を伝えるね」

サツキは浩介に思いがけない言葉をかけた。

「私は、もう大丈夫だよ。だから、私に縛られないで浩ちゃん自身の道を歩いて」

浩介は驚いて、言葉も出なかった。

「それって、サツキのことを忘れろってこと？」

「そうとは言っていないよ。もう時間だね。さよなら、浩ちゃん」

白は濃くなり、サツキの姿は見えなくなった。

朝、浩介は自分がベッドの上にいることを確認できた。

「夢、か……」

浩介はサツキに言われたことを考えていた。ただ、サツキに言われたことで浩介は漠然と吹っ切れた。細かいことは分かっている

が、浩介自身は折り合いをつけることができた。

霊園内の一角、榎本家の墓の前に浩介はいた。

「サツキ、ありがとう」

浩介は感謝の言葉を告げる。

「サツキと色々な場所に行つて、いろんなものを食べて、いろんなことを経験して、とても楽しかった」

浩介目からはどんどん涙がこみ上げてくる。

「俺を好きになつてくれてありがとう」

最後の言葉を、浩介は告げた。

「さようなら」

浩介は墓から離れていった。その歩みは堂々としており、顔つきは涙を少し流しながらも憑き物が落ちたような晴れ晴れとしたものだった。

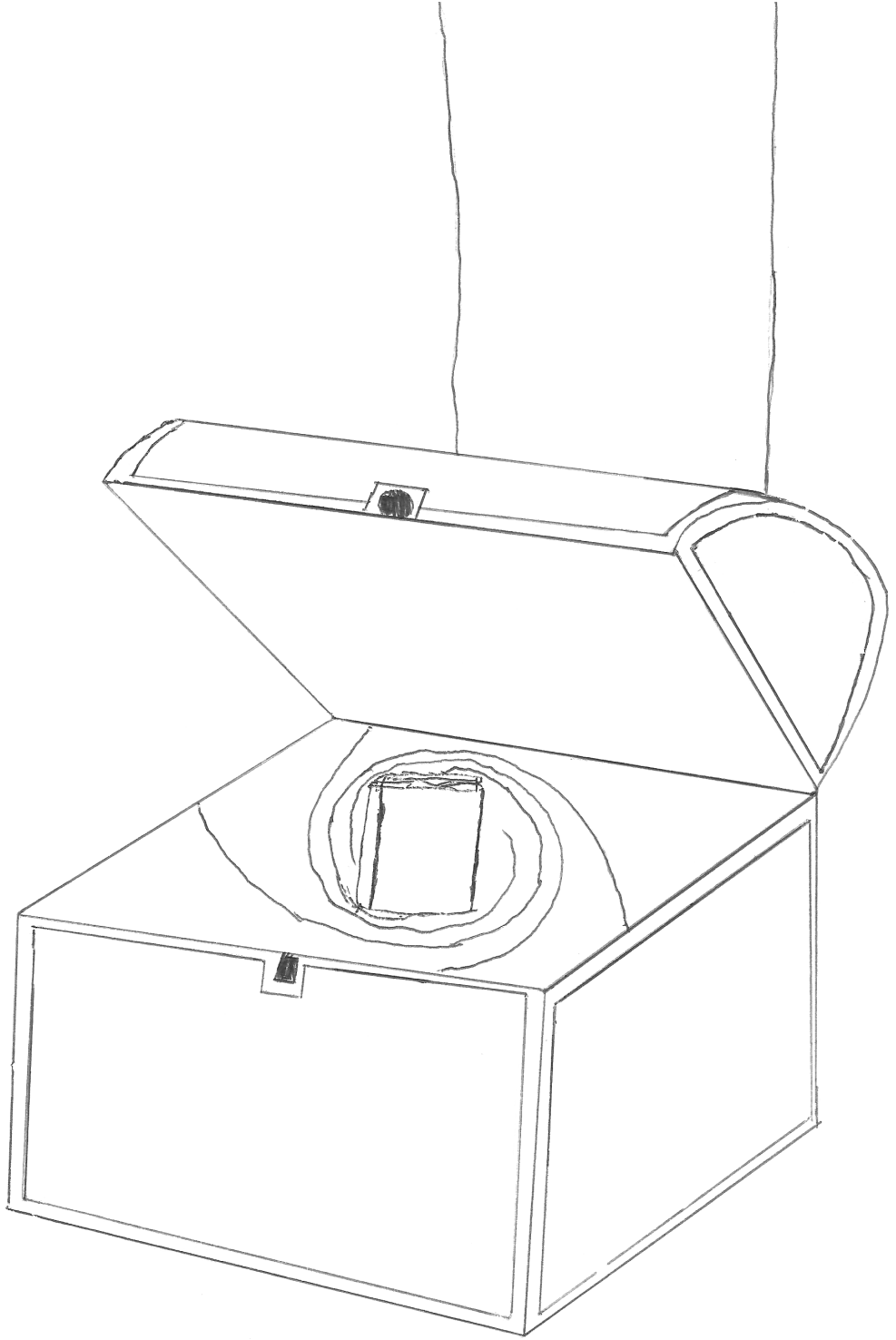
「浩ちゃん、私を忘れないで」

後ろからサツキの言葉が聞こえた気がする。

「うん、忘れないよ」

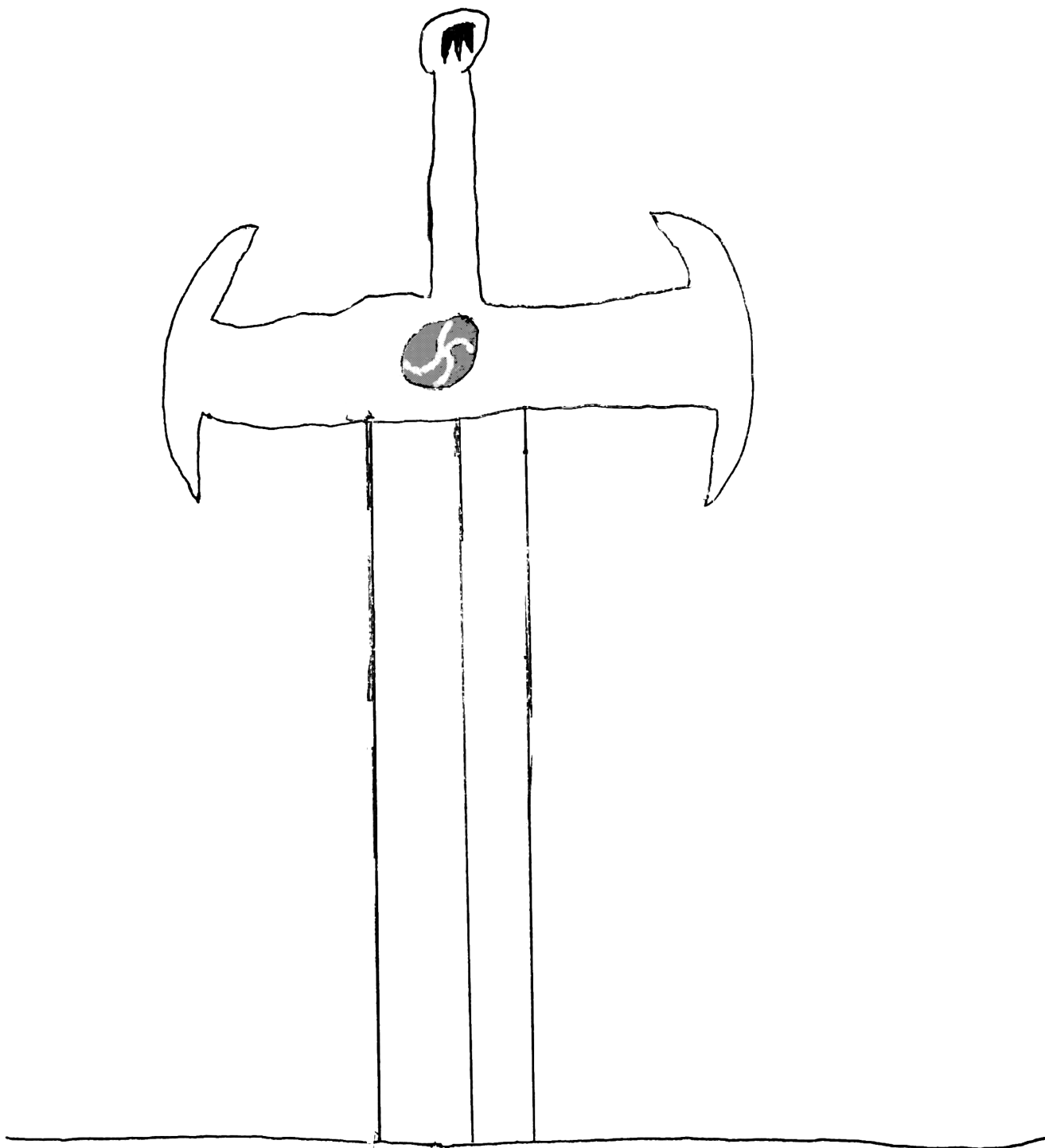
浩介は、サツキに届くよう、自分へ言い聞かせるように呟いた。

了

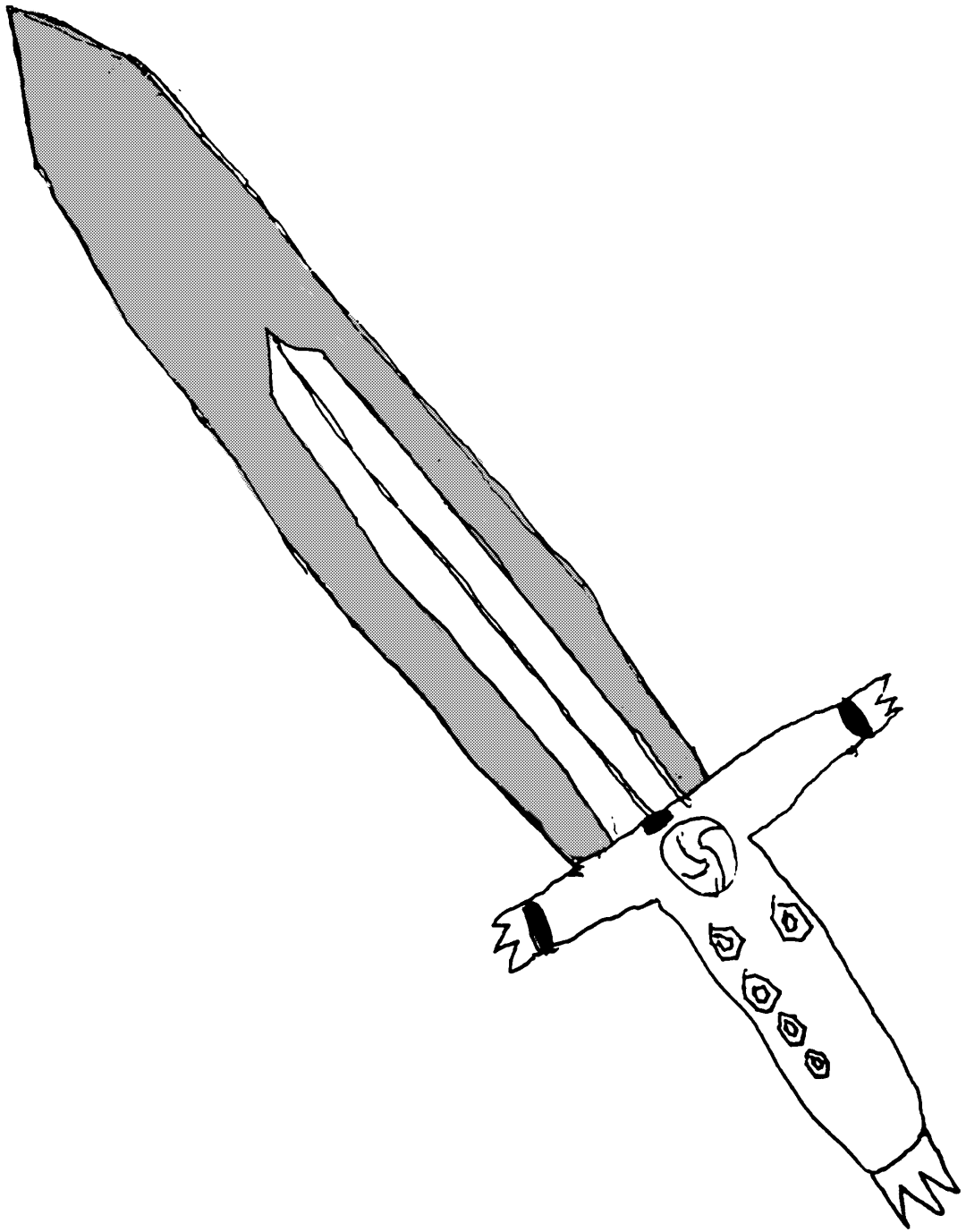


Illustration

イラスト

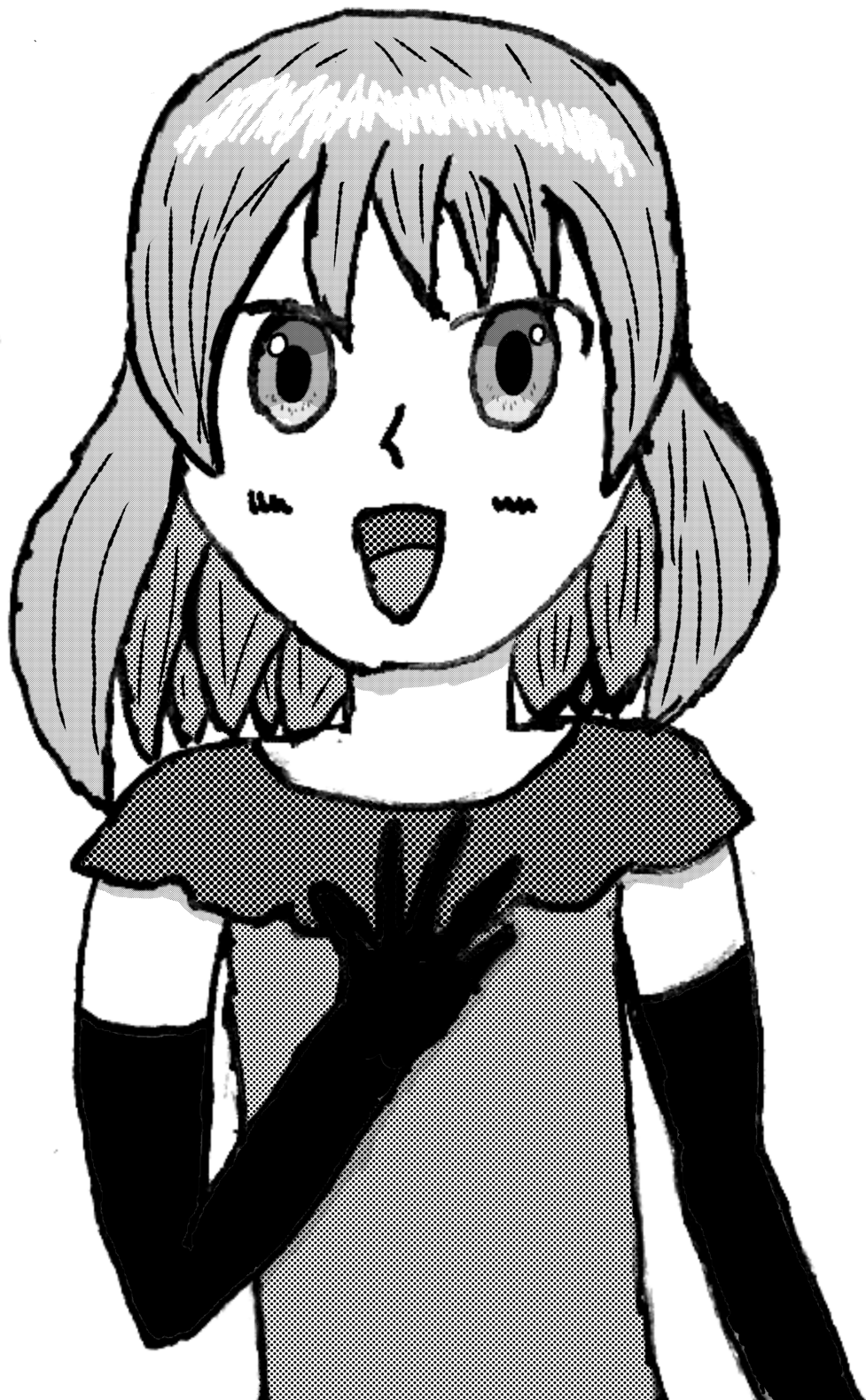


7-14



夕 = 14

akkodon





みの

あとがき

こんにちは。編集を担当させていただいた、しゅうです。現代視覚文化研究会の秋会誌『なげなしのかね』をお読み頂き、ありがとうございます。いかがだったでしょうか？

最近、徐々に寒くなっていて、ようやく平成最後の夏が終わるのだと実感しています。と思つたら、急に寝苦しいほどに暑くなつて、意味がわかりません。

突然ですが、高専祭はいかがだったでしょうか。

この会誌を、まさに高専祭の真つ最中に読んでくださっている方も、終了後にゆつたりと眺めている方もいることだと思えます。

高専祭というのは、多くの奈良高専生にとつて、自分をアピールする数少ない機会だと思います。研究の成果を発表したり、部活の活動を展示したり……はたまた、屋台であったり、軽音や吹奏楽といった演奏だったり、コスプレであったり。表現の形に差はあれど、自分の努力を見せるという点では、すべて共通しているのかもしれない。

これは現視研にも言えることで、特に一年生にとつては、初めての経験が数え切れないほどあったかと思えます。作品を手渡して受け取ってもらい、直に感想をもらう。……たぶん、あまり簡単にできる経験ではないと思います。私もあまりないです。

いやまあそれ以前に、不特定多数に向けて作品を見せること自体とても難しいことです。なにせ、自分の恥ずかしい部分を惜しげもなく吐露して、はじめて完成するものですから。これには、作品の形態もクオリティも関係ありません。……そうですね、現視研の部員たちは、「黒歴史」という闇のワードに苛まれながら作品を創りあげているんです(たぶん)。

です。今回の展示にご来場いただいた方、特に一般の方は、ぜひ我々の活動を温かい目で見守っていただけたら、と思います。そして、ちよつと気が向いたら、他の作品も見てもらえると嬉しいです。

……全体的に真面目な感じになってしまったので、ちよつと中和しておきます。おっばい！

最後に軽く宣伝です。

本会誌や過去の会誌は、ホームページに掲載しております。PDF形式でダウンロードすることもできますので、スマホでも読むことが可能です。

また、Twitterアカウント (@mcl_mvcs) もご覧いただけます。ぜひチェックしてください。

ということまでお読みいただき、ありがとうございました。それでは！

しゅう